2020.11.27.
T.Kobayashi

大相撲 11 月場所観戦記

<1>　またまた両横綱休場

鶴竜の戦績を振り返ると、横綱在位 266 勝 117 敗 190 休（勝率=0.464）、幕内在位成績で見ると 645 勝 394 敗 194 休（勝率=0.523）。幕内在位記録から横綱在位記録を差し引き、横綱になる前の成績を出してみると 379 勝 204 敗 4 休（勝率=0.646）。

つまり、横綱になってから 3 割しか出場できていなく、優勝又はそれに準ずる好成績を残した場所もあるかもしれないが、総数としては勝ち越すことができていないということになる。

特に、ここ三年間の足取りを、表−1 のようにまとめてみた。（赤字は優勝）

表−1　鶴竜の直近三年間の成績

平成 30 年		令和元年		令和 2 年	
1 月	11 勝 4 敗	1 月	2 勝 4 敗 9 休	1 月	1 勝 4 敗 10 休
3 月	13 勝 2 敗	3 月	10 勝 5 敗	3 月	12 勝 3 敗
5 月	14 勝 1 敗	5 月	11 勝 4 敗	5 月	—
7 月	3 勝 3 敗 9 休	7 月	14 勝 1 敗	7 月	0 勝 2 敗 13 休
9 月	10 勝 5 敗	9 月	4 勝 4 敗 7 休	9 月	全休
11 月	全休	11 月	0 勝 1 敗 14 休	11 月	全休
年間	51 勝 15 敗 24 休 （勝率=0.567）		41 勝 19 敗 30 休 （勝率=0.456）		13 勝 9 敗 53 休 （勝率=0.173）

白鵬・鶴竜が同時に休場となったため「横綱としての身の処し方」として話題の対象となったが、二人の置かれている状況には大きな違いがあることを知る必要がある。

直近三年間の成績をまとめてみると（表−2 のとおりで）、鶴竜とさほど違わないようにも見えるが、白鵬は幕内在位 1076 勝 198 敗 185 休（勝率=0.737 ） 横綱在位 882 勝 128 敗 164 休（勝率=0.751）という戦績で、数々の記録を打ち立てており角界への貢献度は極めて大きい。

表−2　白鵬の直近三年間の成績

平成 30 年		令和元年		令和 2 年	
1 月	2 勝 3 敗 10 休	1 月	10 勝 4 敗 1 休	1 月	1 勝 3 敗 11 休
3 月	全休	3 月	15 勝	3 月	13 勝 2 敗
5 月	11 勝 4 敗	5 月	全休	5 月	—
7 月	3 勝 1 敗 11 休	7 月	12 勝 3 敗	7 月	10 勝 3 敗 2 休
9 月	15 勝	9 月	0 勝 2 敗 13 休	9 月	全休
11 月	全休	11 月	14 勝 1 敗	11 月	全休
年間	31 勝 8 敗 51 休 （勝率=0.344）		51 勝 10 敗 29 休 （勝率=0.567）		24 勝 8 敗 43 休 （勝率=0.320）

横綱審議委員会が何らかの恣意的な行動に出ると想定していたが、場所終了後に予想通り発表された。

白鵬と鶴竜とでは微妙に取り扱いを変える必要があると見ていたのだが、少々意外だった。

いずれにせよ、二人の横綱が「横綱の特権」を行使しているかのような印象を与える「休場の連発」は尋常な状況ではない。「稀勢の里を引退に追い込んだ」こととのバランスを欠くことがないようにする必要があるだろう。

さらにもう一歩踏み込めば、横審との関係はないが「二場所連続して負け越さなければ陥落しない」「陥落直後の場所で 10 勝すれば復帰できる」という大関の特権も見直すべき時がきているように感じている。

名実共に「立派な大関」を生むようにすることで、「立派な横綱」を生み出すことができるのではないかとも感じている。つまり、横綱・大関への「昇進の基準」と組み合わせて検討すべき課題のように思うのだが。

<2> 安堵の千秋楽か

様々な不安と憶測または期待が交錯しあう中で場所がはじまったが・・・・・

千秋楽結びで相星となり、優勝決定戦という盛り上がりで締めるという絶好の流れになり、新型コロナで萎縮した社会に多少なりとも気合いを入れてくれた。

一部マスコミは「また幕尻優勝か？」と、芸能ニュースなみの騒ぎが始まったが、何とか番付通りの優勝者となりほっと安堵の千秋楽となった。

そして又いつものように、優勝した大関には「来場所綱取り」と、優勝同点の小結には「来場所大関取り」と騒ぎ立てる。まずは冷静にデータを観察してみることからだろう。

貴景勝は 2019 年 5 月に大関昇進、同 9 月関脇に陥落、同 11 月特例により 10 勝 5 敗で大関に復帰。

直近三場所の成績は、33 勝 9 敗 3 休（勝率=0.733）であるが、再昇進後6場所（直近 6 場所）の成績は、60 勝 27 敗 3 休（勝率=0.667）。

安定性の見極めが極めて重要な時期になっているということを記しておきたい。

志摩ノ海の相撲は素晴らしかった。「両手を下ろした美しい立ち合い」「前傾姿勢の保持」と「固い脇の締め」に「鋭いおっつけ」と「押し上げるような突き押し」は光り輝いていた。技能賞をやらず敢闘賞にした相撲記者クラブの方々の見識を疑いたくなる。（右画像：千代の国との三重県出身対決）

照ノ富士の復活・復帰は目を引くもので、ここまで地位を戻してくるのには並々ならぬ努力と辛抱があったことと思う。しかし、後半戦になると昔のような「粗雑な力相撲」が目立ち、「後退しながら技を繰り出す」悪い癖が数多く見られた。また、前後左右に動き回る力士との対戦には不安定さを露呈しており、再び怪我をする可能性が常につきまとっている感じがした。膝の故障から復活した力士が抱える課題 「前進相撲に拘って膝への負担を軽減」が当面の大きな課題で、これがこの先ずっと続く課題のようにも感じる。

私見としては、「技能賞=志摩ノ海 敢闘賞=照ノ富士」の方が妥当なように思う。

<3> 立ち合いの正常化

相変わらず立ち合いの乱れが続発しており、「立ち合いの不成立」によるやり直しが目立った。

しかし立ち合いのやり直しを指示する行司は限られており、行司の眼の個人差が感じられる。毎日同じ行司が何人かの力士にこの指摘をしており、よく観察してみると指摘を受ける力士も特定している。

「立ち合い不成立」をしばしば指摘する行司と、殆ど指摘したことのない行司との「眼」の違いはなくさなければならない。また、行司のみならず土俵の周りに座す審判委員についても同じことが言える。

そしてさらに遡っていくと、「仕切り」と「立ち合い」の標準形を明確に定める必要があり、それに伴う「実地研修」を行うべきであろう。

以上